

27
2017.5

薬友会報

千葉大学薬友会



チュラロンコーン大学薬学部学部長一行来学



薬学部 医薬系総合研究棟 I・II

薬友会長・研究院長挨拶	2
退任のご挨拶	2
医学薬学府・副学府長挨拶	3
会員便り	4
薬学部この一年	6
研究室便り	8
クラス通信	13
支部便り	19
サークル紹介	19
学部だより	21
教員の人事異動	21
2017年度 大学院医学薬学府 入学者の状況（4月入学者）	21

第102回 薬剤師国家試験合格状況	21
2016年度 卒業生・修了生の進路	21
2017年度 薬学部入学者の状況	22
2016年の受賞記録	22
薬友会より	23
訃報	23
第26回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー 宮木高明記念講演会開催のお知らせ	24
編集後記	24



薬友会員の皆様におかれましては、益々ご健勝の事とお慶び申し上げます。最近の千葉大学および薬学研究院・薬学部的主要な動きをご報告申し上げます。

平成28年度から全国の国立大学では、平成16年から始まった国立大学の法人化以降、第三期となります6年間の中期目標・中期計画が開始されました。新聞等でも報道されていますように、法人化以降、国からの運営費交付金が継続的に減額されています。この中で、千葉大学はいわゆる第3群という「全ての部局で世界最高水準の教育研究をおこなう卓越研究大学」として発展する道を選び、文科省から認められました。この方針に沿って、平成28年度から国際教養学部が新設され、千葉大学は10学部（人文社会教育系4学部、自然科学系3学部、生命科学系3学部）を擁する総合大学となりました。

この第三期中期目標期間中に卓越研究として本学をリードする6研究課題が、「戦略的重点研究強化プログラム」として学長主導により審査を経て選定されました。幸いなことに、本研究院の教員が推進責任者およびコアメンバーとして提案した「ファイトケミカル植物分子科学」がその一つに採択されました（<http://www.chiba-u.ac.jp/research/>）。さらに今年度には、中堅若手教員が中心となって提案する次世代卓越研究であるリーディング研究育成プログラムに新たに3課題を応募し、本年度以降の一層の研究推進を図っております。このような本研究院の研究面での卓越性は、多くの教員、大学院生、学部生が日本薬学会をはじめとする数々の権威ある学会からの受賞や表彰に輝いている事にも示されています。これらの主な受賞は研究院のウェブサイトにて逐次記載しておりますのでご覧ください。

教育活動面での本研究院・学部の昨年度来の主な動きを述べますと、平成24年度に始まりました千葉県下3大学薬学部（主管校は千葉大学、他に城西国際大学、千葉科学大学が参画）が連携した「実践社会薬学の確立と発展に資する薬剤師養成プログラム」への文部科学省からの補助金交付が昨年度に最終年度を迎えました。このプログラムは同様の活動を行っている四国の3大学の薬学部とも連携し、本年度以降も継続していく予定です。また、千葉大学の教育GPが支援するプログラムとして「グローバルエイジング時代の地域包括医療ケアを支える先導的薬剤師育成プログラムの開発」が昨年度から開始されました。これは、チーム医療である在宅医療において、薬の専門的知識をもつ薬剤師の重要な役割と期待に鑑みて、先導的な教育モデルの開発を目指した新しい取組です。

また、教育研究の国際化について目を向けますと、プロジェクト経費による外国人特任教員等が国際創薬学研究室に配置され、ネイティブ英語での講義等が行われています。さらに、タイ国チュラロンコーン大学や韓国ソウル国立大学などアジアの主要大学薬学部との定期的な教育研究の学生交流やジョイントセミナーが継続して行われています。

本年の薬学部一般入試の競争率は前期日程が6.1倍、後期日程が28.4倍でいずれも千葉大学全10学部の中で継続して最も高い競争率を誇っています。また、平成28年度の薬学部入学者は男子が女子を上回り、29年度入学者においても男女比はほぼ均等となりました。

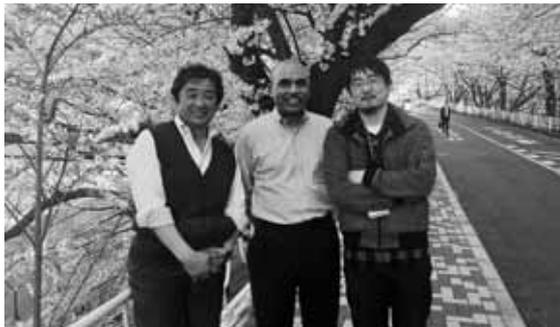
このように、本研究院・学部は発展を続けておりますが、今後6年制学部定員の増員を含めた改組の計画を策定しており、ますますの進展が期待されます。教職員一同、本研究院・学部の発展と学部学生・大学院生・薬友会員のために全力を尽くしたいと思いますので、薬友会員の皆様のご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。

退任のご挨拶

Ashfaq Mahmood

I arrived at Chiba University, in November 2014, as a Professor in the Faculty of Pharmaceutical Sciences; International Scholars in Pharmaceutical Systems Biology. Previously I completed a Ph.D. in Chemistry from Brown University, Providence RI, USA, and a two-year NIH post-doctoral fellowship at The Johns Hopkins Medical Institutions under Professors Henry H. Wagner, Susan and John Lever. Thereafter, in 1989, Professors Alun Jones, Alan Davison (MIT) and Professor S. James Adelstein recruited me as a faculty member at Harvard Medical School in the Joint Program in Nuclear Medicine at the Department of Radiology, where I remained till 2014.

Throughout my education and training, my primary interests have remained in a broad area of medicinal and synthetic chemistry particularly at the interface of chemistry, biology, and medicine. More particularly, over the years, the focus has been in the design of



Prof. Arano Prof. Mahmood Prof. Uehara

small-molecules for target-specific molecular imaging and in applying molecular imaging to study disease. After spending 25 years in various faculty and research positions at Harvard and MIT, I decided to come to Chiba University, Japan, to teach and conduct research at the Graduate School of Pharmaceutical Sciences, as I knew some of the faculty with mutual research interests.

Spending the last two years working in Japan at Chiba University has been a wonderful and rewarding experience for me. I have had numerous interactions and discussions with the very capable faculty and researchers, working in the various aspects of Pharmaceutical Sciences. This has been very rewarding from both a scientific professional point of view, as well as a personal one. I was particularly impressed with the research conducted by the faculty and students, that encompasses a wide range of basic and molecular pharmaceutical sciences from synthetic organic and natural products chemistry to biochemistry and molecular biology including genomics, mechanistic studies of biology and disease, as well as the applied and translational aspects of pharmaceutical sciences.

My interactions with students in undergraduate and graduate classes as well as in the research laboratories have also been very rewarding. I found most of the students, to be very intelligent, dedicated to their work and hard working. As all of my teachings were conducted in English, I was particularly impressed with the student's level of understanding the scientific subjects taught in English and think that further exposure and encouragement would be very beneficial particularly to the graduate students, who aim to pursue and compete at the international level in their fields.

As I depart Japan with reflections of the past year's experiences, I know I will miss the unique culture and culinary delights that I experienced, as well as the many friends and colleagues that I have enjoyed working with on a day-to-day basis. I depart with these treasured memories and hope that many of the friendships will continue into the future.



Prof. Mahmood's wife and friends

医学薬学府・副学府長挨拶

伊藤 素行



2017年4月より、千葉大学大学院医学薬学府・副学府長を務め、薬学研究院を担当させていただくことになりました。医学薬学府薬学領域では、昨年度、人材グローバル化促進のため、新たに修士課程で外国人留学生を対象とした入試選抜方法を実施し、2名が入学しました。さらに、生命科学・創薬科学分野の研究・教育活動を加速させるため、修士課程の修業年限短縮制度を整備しました。研究力に優れた博士課程進学希望者は、修士課程を早期修了し、博士課程へ進学します。この制度を利用して、今年度2名が博士課程へと進学いたしました。これらを合わせ、医学薬学府では4月より修士課程（医学専攻23名、総合薬品科学専攻66名）、後期3年博士課程：先端創薬科学専攻 8名（薬学領域）、4年博士課程：先端医学薬学専攻 110名（医学領域105名、薬学領域5名）、4年博士課程：先進予防共同専攻 13名（医学領域）の新生を迎え、基礎生命科学ならびに医薬品創製に貢献できる国際性豊かな独創性ある研究者、高度の専門技術と研究能力を備えた先進的医療人の次世代リーダーの育成にあたります。

博士課程では、優れた研究者をはじめとする社会の指導的立場に立つ人材を育成するため、大学の枠を超えたグローバルな学位プログラムの構築を進めています。薬学領域では、ダブル・ディグリー・プログラム（統合された学修プログラムを提供する2大学により学位記を授与）が、タイ王国シルパコン大学薬学研究科に加えて、同マヒドン大学薬学研究科とも開始しました。昨年度は、シルパコン大学とのダブルディグリー学生が初めて修了し、4月よりマヒドン大学薬学研究科のダブルディグリー学生1名を受け入れ、更なる進展が期待されます。また、短期間の大学院生の海外派遣受入も行い、昨年度は、タイ（チュラロンコン大学）へ1名の大学院生を派遣、タイから4名（チュラロンコン大学から2名、マヒドン大学から1名、チュラボン大学院大学より1名）の大学院生を受け入れました。

医学薬学府では、文部科学省支援プロジェクト博士課程教育リーディングプログラム「免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラム」やがんプロフェッショナル養成基盤推進プランが実施されています。昨年度、薬学領域では博士課程4名がリーディングプログラムを修了しました。これら修了生が国際的な環境でリーダーシップを発揮してくれることを期待しています。医学薬学府では、今後も、薬学・医学の未来を担う重要な人材である修士・博士課程修了生の育成に努力してまいります。引き続き薬友会会員の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

会 員 便 り

船岡 紀子 (元千葉県健康福祉部技監)

大学卒業後、千葉県庁の薬事・食品関係など行政職として38年、その後の関係団体への勤務を経て昨年4月からは肩書のない家庭の主婦?となりました。

ほとんどストレスがない生活をしておりますが、今後も続くであろう人生の中で何か新たにできることがあるかを考えてはおりますが、急に楽になった日々の生活に埋没し、家族の介護問題に向き合っております。

私たちの世代からは想像もつかないほど現在の薬学教育のカリキュラムや授業内容の多様化しており、学生のみならず教員の方々も日々多忙な毎日を過ごされていると思います。

優秀な学生の皆様は、専門領域の学問だけでなく、直接関係のない自然や様々な他人などとのふれあいにより、より幅広い知識を有した研究者、医療従事者、行政担当者等としてご活躍いただければと祈りつつ、生粋の千葉育ちである私としては、千葉大学薬友会会員として少しでも役に立つことを探していきたいと思っております。
(昭和48年卒業)

小原 佳子

大学を卒業し、地元山陰に戻った私は出産・結婚。3人の子供の子育て真っ最中の30代半ばに、薬局を開業しました。

希望に燃えた開業ではなく、自営業の父が他界し、その会社を存続させねばならず、私にできることは薬局しかなかったのです。

父の喫茶店の名前をそのまま薬局の名前にして、おそろおそろ開業して、はや二十余年。長く続けていると不思議なもので、この頃やっと仕事が楽しくなってきました。

医師への疑義照会や、在宅活動など、正解が見えず煩悶しましたが、あるとき「そうか、患者さんを第一に考えて行動すればいいんだ。」と気づいたら、何もかも吹っ切れました。

薬の箱をひらいて、添付文書の文献欄に、同級生の名前を見つけると、てのひらに光がさすような感覚におそわれます。

『いちめんのなののはな
いちめんのなののはな・・・(山村 暮鳥)』

4年生の進級前の春休み、77Pのみんなで、房総半島を旅しました。あれから30数年、誰もがそれぞれの場所で活躍していることがうれしい。大切な77Pの仲間たち、みんなは私の誇りです。
良き旅をつづけてください。
(昭和56年卒業)

水野 誠



1990年に三共株式会社(現第一三共株式会社)に入社しました。その年に始まったプロジェクトの化合物の薬効評価が最初の業務でした。上市する医薬品に関わることができる薬理研究者(生物活性評価者)は非常に少ないのですが、そのプロジェクトから医薬品(一応薬剤名は伏せておきますが、ご想像ください)が上市できたことは、非常に幸運なことでした。すなわち初期のスクリーニングから、高次非臨床研究、医薬品承認申請に関わる業務まで、一連の新薬開発の業務に関わることができ、いろいろな経験を積むことができました。

その上市後もいろいろな面で製品に関わってきましたが、今年ついに特許満了を迎えました。入社後27年が経ちますが、入社以来の腐れ縁が終わってしまう感じがして、少しさみしい気分です。

近年は新薬の開発がどんどん難しくなっていますが、新薬を患者さんに届けることができるのは最大の喜びであります。今後も医療に貢献できる新薬を開発すべく、頑張っていきたいと思っております。
(昭和63年卒業)

梅山 一大 (明治大学 農学部 生命科学科 発生工学研究室)



1994年3月に山崎幹夫教授が主宰する活性構造化学研究室を修了後、2回の転職を経て、明治大学バイオリソース研究国際インスティテュートに辿りつきました。この研究組織では、遺伝子工学技術と発生工学技術を利用して、遺伝子組換えブタ作製の研究が進められています。ペルー伝承薬の薬効成分の単離方法と活性確認方法を学んでいた学生が、今では遺伝子組換えブタを作っています。

ブタは解剖学的、生理学的にヒトに似ていることから、有用な病態モデル動物になると言われています。これまでに、先天的に高血糖症状を発現する糖尿病モデルブタや細胞外基質の遺伝子変異が原因であるMarfan症候群モデルブタ等を作成してきました。これらの表現型がヒトの病態に良く似ている

事に、私たちは驚かされました。さらに、ブタの臓器の大きさがヒトの臓器と近いことから、移植臓器の作製プラットフォームとしても注目されています。近年、異種キメラ動物の作製法と胚盤胞補完法を利用して、ラットの体内でマウスの膵臓を作る臓器再生の論文が報告されました。ブタではまだ同種キメラによる臓器再生法の確立迄ですが、この論文に刺激されてブタの体内でヒトの臓器を作製する研究が世界中で加速すると予想されます。私たちもこの流れに乗り遅れないように、日々研究を進めています。(平成4年卒業)

有澤 光弘 (大阪大学大学院薬学研究科・准教授)



私の教育・研究活動の原点は千葉大学にあり、今でも御世話になった在籍時のことが懐かしく思い出されます。私は平成6年に活性構造化学研究室(山崎幹夫教授)で卒業研究を行い、博士前期課程時に薬品合成化学研究室(中川昌子教授)で有機合成化学の「いろは」を学びました。また、薬品合成化学研究室に助手として所属しました(平成11年4月~17年10月)。

現在は、ものづくりの基盤となる有機合成化学を基軸に、新しい科学の創出に向け、研究院・学生と共に目の前の研究と毎日格闘した充実した毎日を送っています。近年は、従来から展開している新反応・新合成法・生物活性化合物合成に関する研究に加え、境界領域研究を積極的に展開しています。例えば、これまで精力的に研究されて来た原子状均一系金属触媒に代わる新しい金属(Pd、Ni、Ru、Fe、Ptなど)ナノ粒子触媒、熱効果を除外したマイクロ波反応装置、近赤外吸光・蛍光色素などを開発しています。また、関西地区で定期的開催されている、アカデミア・日本医療研究開発機構(AMED-west)・企業研究者の勉強会、「関西バイオ創薬研究会」での事務局を担当しています。

アカデミア・企業研究領域でも多くの千葉大学出身者が活躍しており、私も様々な場面で、千葉大学出身者に励まされています。今後も、大きな夢を抱いた若者が千葉大学から続々と巣立つことを楽しみにしています。(平成6年卒業)

森 健一 (アステラス製薬株式会社 つくば研究センター 主任研究員)



薬品物理化学研究室で学部4年から博士3年までご指導いただいた後、製薬企業の研究職となつて10年が経ちます。その間一貫して、コンピュータ支援薬物設計に携わっています。大学院修了後は、米国Merck社の子会社であった万有製薬(現MSD)に入社し、2年間を過ごしました。日々深夜まで海外と連絡をとり、創薬研究の最前線に追いつこうと必死でしたが、大学院で習得した技術を海外の研究者に指導することもあり、研究への積極的でオープンな姿勢に驚いたことを覚えています。その後、国内の研究所が閉所となり、アステラス製薬に入社しました。X線結晶構造が数多く得られる環境で、様々な創薬プロジェクトへ関係することができ、大変充実した研究生活を過ごしています。

現在、人工知能が世間を騒がせております。「機械との競争」のペースが急速に上がってきている中、教育の重要性がますます増してきている、と感じます。総合大学である千葉大学、そして薬学部には、そのような時代に求められる、幅広い視野からアイデアを出す能力やコミュニケーション能力を培う機会が多くあると思います。卒業生の今後のご活躍を祈念するとともに、私もそのような時代に活躍できるように取り組んで参りたいと思います。(平成14年卒業)

岡田 直樹 (トーアエイヨー株式会社 研究開発部 東京研究所 探索研究第一課)



私は2001年に薬学部に入社して大学院修士課程を修了した後、2007年より製薬企業で新薬の研究に携わっています。学部4年生からは生体機能性分子研究室に所属して高山廣光教授のご指導の下、諸先生方や研究室の仲間たちと共にとっても有意義な研究生活を過ごすことができました。歴史を感じさせる西千葉キャンパスで昼夜問わず研究に没頭した3年間は非常に濃密で思い出深く、現在の私の研究者としての基盤を作ってくれたものと実感しています。2011年からは非常勤講師として大学院講義を受け持たせて頂き、新しい亥鼻キャンパスに何うのを毎年楽しみにしています。

現在、私はメディシナルケミストとして、研究室時代に培った有機合成の技術・知識に加えて、コンピュータを用いたシミュレーション技術なども活用して、新規化合物の探索を行っています。自分が合成した化合物に望む活性が認められた時の達成感は格別です。また、1つの薬を世に送り出すためには多くの人が協力してプロジェクトを進めますが、その化合物を合成(設計)した生みの親になれるのはメディシナルケミストに他なりません。私もいつか薬の生みの親になれるように、これからも研究に邁進していきたいです。(平成17年卒業)

文部科学省大学間連携共同教育推進事業「実践社会薬学の確立と発展に資する薬剤師養成プログラム」

本プログラムは千葉大学が代表となり千葉科学大学、城西国際大学との協働のもと、平成24年度採択されたものです。本プログラムでは社会の要請を踏まえ、先導的な薬剤師の育成を目的とし、当初、5つのプログラム、11クラスを準備しスタートしました。基礎知識はe-learningにより好きな場所、好きな時間に習得し、その後ワークショップ・演習を行うことでアドバンストな薬学知識を実践的に身につけることが統一した教育方針です。その後、3クラスを増加しプログラムの充実をはかり、のべ344人の学生が受講し、36人の連携実践社会薬学コース修了生（5単位取得生、うち千葉大18名）を出すに至りました。三大学で60名以上の教員が関わり大学間の協働教育に対する理解も深まりました。2月にはプログラムに参加した3大学の学生から成果の発表がありました。同じ事業に採択された「四国の全薬学部の連携・共同による薬学教育改革」プログラムとの連携も生まれています。文部科学省からの経済的支援は平成28年度で終了しますが、これまで培ったネットワークと経験は大変貴重なものであり、今後も少し形を変えながら継続する予定です。



「実践社会薬学の確立と発展に資する薬剤師養成プログラム」との連携も生まれています。文部科学省からの経済的支援は平成28年度で終了しますが、これまで培ったネットワークと経験は大変貴重なものであり、今後も少し形を変えながら継続する予定です。



徳島文理大学桐野豊学長を交えての成果発表会（2月18日）

文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」 千葉大学薬学部 城西国際大学薬学部 千葉科学大学薬学部

実践社会薬学の確立と発展に資する 薬剤師養成プログラム



主体的に学び社会へ還元できる薬剤師教育

「実践社会薬学の確立と発展に資する薬剤師養成プログラム」とは・・・
千葉三大学が連携し、社会の高度化した要請にこたえることのできる薬剤師の養成を行う取り組みです。三大学が連携して、原在薬剤師の関与が強く促されている現状に際する「実践社会薬学教育プログラム」を作成し、スタートホールダーと選定の上、社会の要請に対して主体的に学び社会へ還元できる薬剤師教育を行っています。

本プログラムの実施概要

千葉大学薬学部、城西国際大学薬学部、千葉科学大学薬学部が連携し、実践社会薬学教育プログラムを実施。

連携実践社会薬学コース修了生
認定授与学生

本プログラムの実施結果

2014年度から2017年度までの実施結果をまとめた。2014年度は11クラス、11名が受講し、1名が修了した。2015年度は14クラス、14名が受講し、2名が修了した。2016年度は17クラス、17名が受講し、5名が修了した。2017年度は20クラス、20名が受講し、8名が修了した。合計で52クラス、52名が受講し、16名が修了した。

本プログラムの今後の展望

2018年度以降は、23クラス、23名が受講し、11名が修了する予定です。

教育GP

現在、日本では高齢化が進み、在宅医療が推進されています。在宅現場で薬剤師の存在意義は高いものの、まだ多くの薬剤師が活躍しているとは言えません。平成28年度千葉大学教育GPで採択された「グローバルエイジング時代の地域包括医療ケアを支える先導的薬剤師育成プログラムの開発－世界へ発信できる教育モデルの開発を目指した取組－」では、在宅医療で活躍できるスキルを身につけるための効果的な先導的薬剤師の育成プログラムを開発することを目的として、講義、演習、動画を利用したeラーニング、在宅現場での実習などを組み合わせ、学生が主体的に学習できるような教育プログラムの開発を目指しています。



国際交流の現況

本年度は新たな協定締結校としてタイ国シーナカリンウィロート大学薬学部、インドSRM大学と学部間協定を新たに締結し、学生を中心とした交流を開始しました。またイラク国立バグダッド大学と大学間交流協定が締結(2017.2.13)され、薬学研究者でもある学長一行が来学(写真)され、今後大学院生の交流について具体的な協議を行いました。一方タイ国立チュロンコン大学薬学部をはじめとする複数の大学から、協定による短期(3か月)インターシップ留学生の訪問や本学からの短期(約2か月)留学もあり、ここ数年学生の交換留学が活発化しています。来訪した留学生の中には、留学を契機に本学への大学院進学を希望するケースが増えており、協定校との交流内容も具体的な成果として現れています。一方韓国ソウル国立大学薬学部とのジョイントシンポジウムも回を重ね、2月初旬、極寒のソウル市内で第4回目が開催されました。本学からは6名の若手教員が最先端の研究成果を発表し、親交を深めました。さらに台湾台北医科大学と、医学部・看護学部と連携した協定締結に向けて動き出すなど、薬学部・薬学研究院は千葉大学が目指すグローバル化の中心的役割を担っています。これまで深い交流実績をもつ協定校との関係を更に深めるとともに、新たに世界中の薬学系大学との交流協定を締結し、より質の高い薬学教育環境の整備に勤めていく所存です。今後益々のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



バグダッド大学学長一行の表敬訪問(平成29年2月13日)

成績優秀賞・修士論文優秀発表者が決定



4年博士課程 森井真理子さん、修士課程 金田結さんが医学薬学府長表彰成績優秀賞を受賞しました。受賞者は、3月24日の学位記伝達式において表彰されました。また平成25年度修士論文発表会からの試みとして、優秀な発表を行った学生に対して「修士論文優秀発表賞」を実施しております。選考では研究内容、発表内容、発表態度、質疑応答等が審査されます。平成29年3月1日、3月2日に行われた修士論文発表会では、昨年度に負けず劣らず素晴らしい発表がされました。今年度は、青木千咲さん、金田結さん、佐藤裕之さん、通山紫乃さん、橋本直宏さん、吉岡佐保さんの発表が優秀発表賞に選ばれました。金田さんはなんとダブル受賞です！3月24日の学位記伝達式の際に行われた表彰式では、表彰状と記念品が授与されました。

第12回ソフトボール大会を開催



薬品合成化学研究室は近年毎年優勝候補に挙がるチームでした。しかし、攻守が噛み合わず、これまでは最高でもベスト4止まりでした。今年は、豊富な人材と8月の毎週1度の練習の甲斐もあり、初の優勝を遂げました。B4からD3まで男女全員が活躍し、薬品合成化学研究室らしい一致団結した最強のチームでした。また、今となつての裏話ですが、日程最終日・前々日に大雨が降ったにも関わらずソフトボール大会が行われたのは、実は各前日に薬品合成化学研究室が自主的にグラウンド整備をしたためです。日が落ちて真っ暗になるまで吸水作業を行いました。苦労も喜びも、たくさんの思い出が詰まったソフトボール大会でした。

研究室便り

薬化学

卒業生の皆さん、最近の薬化学研究室の動向は以下の通りです。

☆2016年4月、根本研究室2年目がスタートしました。

☆2016年8月、恒例の研究室対抗ソフトボール大会に参加しました。

☆2016年9月、研究室旅行で箱根に行きました。

☆2016年10月、学長杯争奪第11回千葉大学駅伝大会に参加しました。

☆2017年2月、新たに3年生4名が薬化学研究室に配属されました。

☆2017年3月、井上君、田中君、森口君、村元さんが学位を取得し社会に飛び立ちました。

2017年度は、スタッフも一人増え総勢23名で薬化学研究室を運営していきます。



薬品合成化学

副学長を兼任する西田篤司教授のもと、研究室全員がそれぞれの有機合成化学に励んでいます。先日行われた博士課程の研究業績発表会ではD3の天見と森川が堂々と英語発表をこなし、頼もしい限りです。また、オタワ大学の大学院生との研究交流、学部5年の渡部と修士1年の松本のタイへの短期留学と、実りある国際交流が進んでいます。1月には3年生が配属され、一段と若返り活気がみなぎっています。近くにお越しの際は是非お立ち寄り下さい。

研究面では、新しい不斉反応の開発・遷移金属触媒反応・複雑天然物の効率全合成を柱に基礎研究を展開しています。これらの研究に携わった院生は学会表彰も受けており、彼らの今後の活躍が楽しみです。



生体機能性分子

28年度は高山教授、北島准教授、小暮助教と博士課程4名、修士課程13名、学部6年生1名、学部5年生1名、学部4年生5名の計24名の学生が在籍し、アルカロイドをターゲットにした合成研究、成分探索研究、医薬化学研究に取り組みました。昨年10月に本学で開催された「第21回天然薬物の開発と応用シンポジウム」において、小野沢忠吉くんが優秀発表賞を受賞しました。また今年1月よりタイ王国チュラポーン研究所より博士課程の学生を受け入れ、交流を深めながらともに研究に励んでいます。今年博士課程の徳田涼子さんと平間拓くんが学位を取得しました。学位論文の題目などにご興味のある方は研究室のHPをご覧ください。



活性構造化学

活性構造化学研究室では平成28年に二つの学会をお世話しました。一つは10月27-28日に開催した第21回天然薬物の開発と応用シンポジウムで薬学部120周年記念講堂で行いました。本学会は日本薬学会の生薬天然物部会主催のシンポジウムで、種々の天然薬物等に関する最先端の研究が発表されました。写真はポスター会場（I期棟1階）での発表風景です。また12月10日には第53回植物化学シンポジウムを同じ会場で行いました。中国人1名を含む5名の招待講演者による最新の植物化学に関する貴重な講演会が開催されました。いずれの学会も千葉大学戦略的重点強化プログラム「ファイトケミカル植物分子科学」からの協賛を賜りました。



製剤工学

2016年度は海外雑誌に10報の論文を発表しました。関連学会では、学生が計6つの優秀発表賞（青木さん、一志さん、岩井さん、片井さん、與那城さん、劉さん）を受賞しました。本年の卒業生6名は、製薬関連の研究職（製剤・分析）で活躍しています（アステラス製

薬、沢井製薬、中外製薬（2名）、日産化学工業、日本新薬）。現在、中国・タイからの留学生計4名が大学院生として在籍しており、インターンシップや短期留学など国際交流も活発に行っています。青葉の森公園でのBBQや研究室旅行、スポーツ大会などでリフレッシュしながら、本年度も研究室一丸となり研究活動に邁進していきます。仲井由宣先生を偲ぶ会が、6月10日都内にて開催されます。詳細は研究室HPをご覧ください。



薬品物理化学

研究室では生物無機化学解析や計算科学的手法による創薬研究を進めています。昨年度は、*Inorg. Chem.*, *Biochim. Biohys. Acta*, *Tetrahedron.*, *Chem. - Eur. J*などの国際誌に論文を発表しました。米田助教は博士課程での優れた研究実績が認められ、Elsevier社が主催するReaxys PhD Prize候補の最終メンバーに選ばれ、昨年9月にロンドンで招待講演を行い、今年3月の日本化学会でも特別講演をしました。教員と学生たちは講義や実験などに追われながらも、研究室旅行や定期コンパなどで日頃のうさ晴らしをしています。卒業生の皆様には、いつでも気軽にお立ち寄りください。



遺伝子資源応用

平成28年度も植物の薬理成分や機能性成分の生合成研究に精力的に取り組ましました。最近の研究活動の詳細については、研究室ウェブサイト (<http://www.p.chiba-u.jp/lab/idenshi/>) をご覧ください。平成29年3月には齊藤和季教授が平成29年度日本薬学会賞を受賞し、研究室OB/OGの皆様や現研究室員が携わった研究成果の評価の高さが示されました。研究の合間にはレクリエーションも楽しんでおり、夏の薬学部ソフトボール大会では薬品物理化学研究室との合同チームで準優勝しました。日々楽しみつつも真剣に研究活動に励ん



でおりますので、今後とも温かいご支援をお願い申し上げます。

分子細胞生物学

当研究室は、教員3名、学振博士研究員1名、大学院博士6名、修士8名と学部生3名が在籍し、がん細胞のシグナル伝達の研究に取り組んでいます。特に、核内チロシンリン酸化によるクロマチンダイナミクスとエピジェネティクス制御、DNA傷害によるチロシンリン酸化シグナル、TGF- β による上皮間葉転換シグナルなどの研究が進んでいます。第136回日本薬学会では、柴崎美里さんと幸龍三郎君が優秀口頭発表賞に選ばれました。平成29年3月にはシラバコーン大学薬学部からの留学生Tragulpakseerojnさんが千葉大学とシラバコーン大学でダブルディグリー取得予定です。教室員全員で頑張っておりますので、研究室のHPもご覧ください。また、卒業生の皆様、お気軽にお立ち寄りください。



生化学

平成28年度は教員3名・職員2名・学生20名に共同研究を行っている園芸学部の学生2名も加わり総勢27名となり、伊藤素行教授が平成24年に赴任して以来最大の人数となりました。

現在の生化学研究室では培養細胞・ゼブラフィッシュ・ショウジョウバエを実験材料として、細胞内のタンパク質の分子動態から個体の記憶行動まで幅広い生命現象を対象として解析を行っています。各自が自分の研究に真摯に取り組み、工夫しながら実験を進めています。中には独自に研究装置を自作してしまう学生もいます。今後も研鑽を重ね、研究に邁進していきたいと思ひます。



微生物薬品化学

本研究室は、スタッフ3名（川島博人教授、高屋明子准教授、平川城太郎助教）、研究員1名、博士後期課程3名、博士前期課程9名、学部生9名で構成されています。昨年3月に平川助教が着任し、糖鎖免疫学と微生物学を融合させた新たな研究を進める体制が整い

ました。6月には、日本医療研究開発機構(AMED)の「糖鎖利用による革新的創薬技術開発事業」に川島教授が研究代表者として採択され、研究課題「世界初の抗糖鎖抗体医薬の開発に向けた革新的抗糖鎖モノクローナル抗体作製技術の開発」を研究室一丸となって進めています。昨年は日々研究活動に進進する中、スポーツ大会などでリフレッシュする時間もたくさんありました。これからも1日1日を大切に、皆で協力しながら、楽しくそして真剣に研究に取り組んでいきたいと思ひます。



遺伝子創薬学

遺伝子創薬研究室は、かずさDNA研究所との連携講座です。1)中山らは、新しい部位特異的組み換えシステムを開発してゲノム中の特定の遺伝子や領域を人工的に変えるゲノム改変技術開発、2)鈴木らは、新型シーケンサー・新型質量分析機器によるトランスクリプトーム・メタボローム解析を通して、機能性代謝物の生合成研究及びトランスオミクス統合解析における新しい解析手法の技術開発、3)大関らは、人工合成したDNA配列からヒト人工染色体を作成し、創薬に役立てる研究を行っています。我々は、生命のゲノム情報を基に、先端のDNA塩基配列決定技術や質量分析技術を駆使し、新しい創薬への道筋を生み出せたらと願っております。



病態分析化学

病態分析化学研究室では、戸井田敏彦教授、西村和洋准教授、東恭平助教、大学院生7名および学部学生9名が分析化学に基づいた生命現象の解明と応用を目指し、日々研究に取り組んでいます。最近のトピックスを紹介します。1)博士課程の今村正隆さんがポリアミンによるヘパラン硫酸合成調節機構を解明し学位



を取得しました。2)バカ貝由来コンドロイチン硫酸のHPLC分析の際に、OBOGの皆さんがずっと不思議に思っていた謎のピークはケラタン硫酸でした。3)新4年生のプレ実験ではムツゴロウ、トビウオ、サザエ及び海鞘から糖鎖を抽出し分析しています。今年も分析化学に基づいた新しい研究分野の開拓を目指していきます。

分子画像薬品学

本研究室は、4名の教員と博士課程4名、修士課程5名、学部学生10名、秘書1名の総勢24名で構成されています。国際創薬研究室Ashfaq Mahmood教授とも連携を取って、英語でのディスカッションが行われています。本研究室では、がんの画像診断薬剤やアイソトープ治療薬剤の開発研究を進めており、最近では、これら研究の両輪を融合したtheranostics (therapy + diagnostics) への展開も目指しています。コンパ、研究室旅行、秋のソフトボール大会を楽しみつつ、日々研究活動に励んでおります。OB/OGの皆さま、いつでもお立ち寄り下さい。



予防薬学

平成28年度は、教員2名、修士課程学生9名(10月入学含む)、学部学生6名(6年生1名、6年制課程の4年生5名)、補佐員3名の体制で活動しています。今年度からは実習の担当もスタートし、教育では全面的に衛生薬学教育に貢献することとなりました。ICP-MSに加えて、幸いにも今年度からタンデム型のICP-MS(ICP-MS-MS)の利用が可能となり、さらにユニークな研究展開が図れるのではないかと期待しています。5月には岐阜で開催されたセレンとテルルの化学に関する国際会議にてM2の遠藤君と6年生の渡邊君が発表を行いました。今年度の修士・卒業生は、公務員として、薬事、環境、衛生等の分野で活躍します。

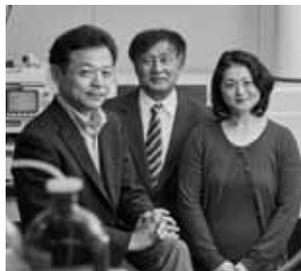


環境リスク

環境リスク研究室は、国立環境研究所の研究者から構成される連携講座です。環境中に存在する化学物質

の有害性メカニズムやリスク評価手法を研究しています。平野靖史郎教授（環境リスク・健康研究センター副センター長）が定年に伴い平成28年度末で退任し、後任に中島大介教授（同主任研究員）が就任しました。他の所属教員は青木康展教授（同フェロー）と小林弥生准教授（同主任研究員）です。

「中島大介連携教授・自己紹介」植物病原菌に関する研究、抗生物質の単離同定、衛生化学、分析化学、廃棄物研究等を経て、近年は大気や環境水の化学的測定とバイオアッセイによる毒性測定の統合的なアプローチによる研究に取り組んでいます。また、災害等の緊急時の環境調査手法に関する研究やその体制作りに向けた活動も始めています。



薬効薬理学

平成29年の3月では、学生21名「博士課程2名、修士課程2年4名、修士課程1年3名（他1名休学中）、学部5年2名、学部4年5名（薬学2、薬科学3）、学部3年5名（薬科学5）」が在籍していました。昨年の大きなトピックは准教授だった藤野裕道先生が、6月1日から、徳島大学大学院医歯薬学部生命薬学系・分子情報薬理学の教授にご栄転されたことです。それまで助教だった中村浩之先生が、10月から准教授に昇任され研究室のこなめを務めています。後任の教員ポジションが6月から空席で2名の教員で四苦八苦していたところでしたが、この4月から「国際創薬学研究室に山形一行先生が特任助教として着任」し、同時に私たちと一緒に研究・教育活動を行って来ています。中村准教授を中心にしたセラミド代謝とニーマン・ピック病C型の研究は日本医療研究開発機構（AMED）の「難治性疾患実用化研究事業」に採択され、着々と成果を上げつつあります。また、セラミド代謝関連薬物や既知臨床薬であるシクロスポリンの肺線維症治療薬への開発・応用も進めているところです。



薬物学

2016年4月より、北海道大学より秋田英万先生が教授へと就任しました。准教授の小林カオル先生や、医学部に異動された降幡知巳先生と協力しながら研究室を運営しています。2017年3月の時点で、千葉大学に所属する学生の構成は大学院生6名（博士後期課程5名、博士前期課程1名）、学部6年生5名、学部5年生3名、学部4年生4名（6年制1名、4年制3名）、学部3年生5名（6年制2名、4年制3名）です。この他に、秋田先生の赴任と共に、北海道大学から特別研究生として大学院生（博士後期課程5名、博士前期

課程1名）が研究室に参加してくれており、計26名の学生と研究に励んでいます。今年度は、各種学会で、優秀発表賞を8件受賞しています。新たな体制のもと、今後も研究室を盛り上げていきたいと思っています。新たなHPもできましたので、御覧ください。



生物薬剤学

生物薬剤学研究室では、現在、教員3名（伊藤晃成教授、関根秀一講師、青木重樹助教）、大学院生10名（博士課程5名、修士課程6名）、学部生（7名）の研究体制で、医薬品による毒性発現の分子メカニズムとこれに基づく毒性予測法開発に向けた研究に取り組んでいます。昨年6月に関根講師が日本毒性学会技術賞を受賞し、学生では、薄田健史君が第11回トランスポーター研究会年会（優秀発表賞）、第23回日本免疫毒性学会学術年会（学生・若手優秀発表賞）、日本薬物動態学会第31回年会（ベストポスター賞）、竹村晃典君が第23回HAB研究機構学術年会（最優秀発表賞）、藤森惣大君が第23回日本免疫毒性学会学術年会（学生・若手優秀発表賞）、第1回黒潮カンファレンスでは、平尾卓也君と菊谷芽久美さんがそれぞれ最優秀ポスター賞、優秀ポスター賞を受賞するなど、日々の研究成果を積極的に各学会にて発表しています。今春3月末には企業の研究職、開発職へとそれぞれの道を歩き始めております。また1月には学部3年生（4名）を研究室に迎え、新たな体制で研究がスタートしています。研究室HPも是非覗いてみて下さい。



分子心血管薬理学

当研究室では、循環器疾患の病態解明やそれに基づいた新たな治療法の開発を目指した研究を行っています。わが国では高齢化や生活習慣の欧米化により心不全の患者数は増加傾向にあります。これまでたくさんの心不全治療薬が開発され使われてきましたが、治療に反応せず改善がみられない患者さんはまだ多くいらっしゃいます。特に重症の心不全では、生命予後は極めて悪く心臓移植しか治療法がありません。病気の進行を止めるよう



な有効な治療薬を開発して患者さんの役に立ちたいと思います。ゼロからスタートした研究室ですが、メンバーは医学部の大学院生も合わせて10名を超える規模になりました。皆、仲良く頑張って研究を行っています。

社会薬学

平成28年は、教員3名、事務補佐員1名、大学院生5名、6年生5名、5年生5名、4年生5名の24名です。



当研究室の研究は、薬物治療などの臨床の課題を扱うため、様々な医療機関や研究施設と連携をもちながら進めており、学外の方々などから多くの刺激を受けつつ、日々研鑽に励んでいます。また、地域貢献として、平成28年6月には「医薬品適正使用に関するたいけん学習」、7月には「おくすり調剤体験～注射調剤を体験する～」、8月には「夏休みくすりとの正しい付き合い方～薬剤師体験～」、9月には「薬物乱用防止に関するたいけん学習」を開催しました。これからも社会との連携を深め、臨床の課題に取り組んでいきたいと思えます。

実務薬学

平成29年4月からは教員3名、大学院生2名、6年生1名、5年生1名、4年生1名の総勢8名の研究室となりました。



研究内容は、「先発点眼薬と後発点眼薬の眼内薬物動態比較」、「在宅現場で活躍できる薬剤師の育成」など臨床現場に近いテーマに加え、帝京大学との共同研究「ウリカーゼKOマウスにおけるNa、血漿尿酸濃度、尿酸トランスポーターとの関係」など基礎研究にも取り組んでいます。

また、千葉大学教育GP「グローバルエイジング時代の地域包括医療ケアを支える先導的薬剤師育成プログラムの開発」として地域で活躍できる薬剤師養成プログラムの開発に取りかかりました。今後とも温かいご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

臨床薬理学

臨床薬理学研究室は現在（平成29年3月）、3名の教員（樋坂章博教授、佐藤洋美助教、畠山浩人助教）と博士課程4名（うち社会人大大学院生3名）、修士課程2名、学部学生15名の計24名の学生が在籍しています。樋坂教授が着任されて3年目に入りました。モデリングを適用し薬理・動態・生化学実験を通じ、医薬品の開発・適正使用、バイオマーカーの発掘、治療効果の高精度予測などの医療への貢献を目指してWetとDry、

基礎から臨床にわたり、多種多様な研究テーマを展開しています。今年度は社会人大大学院生が3名研究室に加わり多くの刺激を受け、日々研究に励んでいます。また博士課程の宇津さんが無事学位を取得し社会に飛び立ちました。



医療薬学

本研究室は、平成29年3月現在、教員2名、大学院生5名、学部学生5名が在籍しております。本年のビッグニュースは、8月1日に有吉範高准教授が岡山大学医歯薬学総合研究科疾患薬理制御科学分野に教授としてご栄転されたことです。今後、岡山大学でのご活躍をお祈り申し上げます。また、5年ぶりに同窓会を開催しました。研究面では、日産化学工業とすすめてきた共同研究で出願した特許「血管平滑筋細胞の培養方法」が本学の優秀発明賞を受賞しました。今後も、研究室員だけではなく病院薬剤部の先生方、共同研究先の先生方との連携を大切に、実りある研究活動を進めていきたいと思えます。



医薬品情報学(マツモトキヨシHD)寄附講座

平成28（2016）年4月に神崎哲人先生が教授として着任され、医薬品情報学研究室は、教員3名（神崎哲人特任教授、石田大祐特任助教、境隆一特任助教）、学部生2名、事務補佐員1名となりました。

本研究室では、生活習慣病・動脈硬化症の基礎から臨床までの研究に取り組んでいます。具体的には、①動脈硬化症の危険因子の作用する動脈壁細胞の性質の研究。②精神疾患患者さんの生活習慣病、動脈硬化性疾患について、関連病院との共同研究。③高齢患者さんの処方実態について、医薬品適正使用の観点からの調査研究などです。

また、マツモトキヨシHDの寄附講座である特徴を生かして、生活習慣病・動脈硬化症について産学連携で基礎的、臨床的研究を進めていきます。



クラス通信

昭和23年卒業

昨年の恒例のクラス会は小生の2回目の入院で開催できずお詫び致します。今年も2月から入院し昨日退院したばかりです。私共は67名の卒業で現在15名が健在です。以前に比べ音信が少なく正確性に若干欠けますが、手許にある情報をお届けします。土浦の中西君は胃を切除してから無事に数年たち現在は元気にデイケアに通っております。湯沢の高橋君は療養中、加茂の長澤君は若干耳が遠くなりましたが元気です。名古屋の片岡君は元気、千葉の大塚君、吉川君、秦君も元気。東京の山下君と奈良の元吉君からは年賀状の便りあり。東京の小沢君は外国旅行を満喫した一方、皆川君からは都心への外出恐怖症との知らせ。神奈川の清水君、小林君は元気。熱海の高橋君は、膝を人工骨に換えゴルフを再開し、奥さんと二人でゴルフを楽しむため品川から熱海に転居したという元気者です。訃報として28年7月に埼玉の豊田君が逝去されたことをお伝えします。皆さん、ここまで来たからには「東京オリンピック」まで頑張りましょう。(三浦 清)

昭和24年卒業

戦後1期生でしかも国家試験1期生。われわれ昭和24年卒は戦後の1期生でしかも国家試験の1期生である。

米寿を迎えた人も多く、このところクラス会も開かれていない。

私自身も病院通いが多くなり、処方箋を以て調剤薬局に行く機会も多くなった。

そこで薬をもらう人を良く観察していると、薬剤師の親切な説明を喜んでいる人が多いのに気づかされる。私も20代の頃病院に勤務したがその頃の医師、特にお年寄りの医師には患者さんが薬の中身を聞くと黙って飲むという人さえいた。

やはりかかりつけ薬局というものは必要であり、良い制度だというのが実感である。

それにしてもわれわれは薬学とは化学と習ったが、薬学は化学と生物学を結ぶ学問であり、薬剤師は人間に向き合う職業だと思う。(酒井 正嘉)

昭和25年卒業

前号には寄稿せずご無礼致し、今回も前向きな便り少なく申し訳ありません。

私共は同期35名、亥鼻で学び、卒業今年で67年になる。一昨年は生存者15名はそれなりの交流を重ねていたが、昨年、松本宏君と高橋俊行君が長逝、安田齊君が消息不明となった。物故両兄の往年の活躍を偲び冥福を祈る一方、信州大名誉教授だった安田君の安否が気懸りである。

この二月、電話で現存者下記12名の近況を確認：東京3（松本峻、角屋勇、宮原源三）、神奈川3（勝又敏雄、石井隆人、田中照夫）、千葉5（飯島昭治、森下良雄、成田昭和、三木春水、鈴木昭治郎）、埼玉1（佐子茂）。最長老の森下さんは93歳。大方は間もなく米寿である。

ご家族が応じてくれた4人は別として、ご本人は電話口の声を聞く限り皆元気。嬉しかったが、一病も二患も抱えながら頑張っているのが実情である。

そんな中、頼もしい御仁がいるのはご同慶である。今も管理薬剤師を続けている松本峻、囲碁と謡曲三昧の角屋勇、級友の消息をよく把握している石井隆人君などである。今回も石井君には何かと世話になった。

入院、通院、或いは自宅で療養中の諸兄には必ずや好転あるを期され、一層お大事に。そしてお互い長生きして春夏秋冬夫々の精気を満喫したいものである。

(鈴木 昭治郎)

昭和30年卒業

80歳も過ぎるとクラスメートも一人欠け二人欠け寂しくなりました。クラス会も毎年やっていますが、出席が数人となり寂しくなりました。各申す私も、現在は老人ホームで生活して、このところクラス会に欠席しています。一応、幹事のようなことになっていますが何のお役にもたてずにおります。現在、幹事は喜多代 泰さん、向後 新四郎さんがやって下さっています。現在の状況をお知らせします。(二月二十七日記)

(原 幸子)

昭和31年卒業 (三一会)

昨年5月、皇居を眺める丸ビルの中華料理店で開催した三一会には、女性7名、男性7名、計14名が元気な顔を見せました。卒業60年(!)、「還暦」の年です。皆思い思いに近況やら、生きがいやらと話に花が咲き、時間が経つのを忘れて楽しい午後でした。

60年間、隔年の国内旅行、都内での会合と、活動を重ねてきました。「還暦」を契機に今後の会のあり方を話し合い、三一会は存続するが旅行はグループ同士で自由に行くこととし、毎年の会合は続けることになりました。

60数年前、共に4年間を過ごした学生生活は、それぞれの人生にとってかけがえのないものであったと思います。そして今改めてお互いの絆を強く感じています。

(馬場 英子)

写真は2016年5月三一会(東京で)



昭和32年卒業 (千葉薬32会)

今年(2017)で卒業(1957)60周年の節目の年を迎える。

卒年に因んで、このところ原則として毎年3月2日に行われているクラス会が、今年も御茶ノ水駅近くの東京医科歯科大学病院内レストランメデイコで実施

学部だより

教員の人事異動

◎採用者

29. 3. 24 田中 浩揮 特任助教 薬物学 (日本学術振興会 特別研究員より)
29. 4. 1 中島 誠也 助教 薬化学 (日本学術振興会 特別研究員より)
29. 4. 1 山形 一行 特任助教 国際創薬学 (同志社大学 特任助教より)

◎退職者

28. 5. 31 藤野 裕道 准教授 辞職 薬効薬理学 (徳島大学 教授へ)
29. 3. 31 ASHFAQ MAHMOOD 特任教授 任期満了 国際創薬学

◎昇任

28. 10. 1 中村 浩之 助教より准教授へ昇任 薬効薬理学
29. 3. 1 吉本 尚子 助教より講師へ昇任 遺伝子資源応用

2017年度 大学院医学薬学府入学者の状況 (4月入学者)

- 修士(薬学領域)入学 66名: 総合薬品科学専攻 66名
博士(薬学領域)入学 13名: 先端医学薬学専攻(4年制) 5名
先端創薬科学専攻(3年制) 8名

第102回 薬剤師国家試験合格状況

平成29年2月25日～2月26日実施

新卒合格率 95.45% (42名: 95.45%は全国73大学中、12位の成績です。)

2016年度 卒業生・修了生の進路

学部4年制47名

- 進学 44名: 千葉大学大学院医学薬学府修士課程43名、京都大学大学院1名
企業 2名: (株)サンドラッグ、日本メジフィジックス(株)
公務員 1名: 東京都千代田区役所

学部6年制44名

- 進学 3名: 千葉大学大学院医学薬学府博士課程(薬学領域)、千葉大学大学院医学薬学府博士課程(医学領域)、筑波大学医学部
病院 15名: 秋田大学医学部附属病院、太田総合病院、神奈川県立病院機構、国立成育医療研究センター、国立がん研究センター中央病院、国立がん研究センター東病院、国立国際医療研究センター病院、埼玉医科大学総合医療センター、湘南藤沢徳洲会病院、千葉大学医学部附属病院、東京都立病院多摩総合医療センター、豊見城中央病院、名瀬徳洲会病院、前橋赤十字病院、琉球大学医学部附属病院
企業 22名: アビームコンサルティング(株)、エーザイ(株)、(株)カワチ薬品、キッセイ薬品工業(株)、クインタイルズ・トランスナショナル・ジャパン(株)、クオール(株)(2名)、(株)サンドラッグ、シミック(株)、住友化学(株)、全薬工業(株)、第一三共(株)、大正製薬(株)、大日本住友製薬(株)、武田薬品工業(株)、帝人ファーマ(株)、鳥居薬品(株)、日本調剤(株)(3名)、ファーマライズホールディングス(株)、(株)メディサイエンスプランニング
公務員 3名: 茨城県土浦保健所、埼玉県庁、千葉県庁
未定 1名

修士修了50名

- 進学 8名: 千葉大学大学院医学薬学府博士課程8名
病院 1名: 千葉大学医学部附属病院
企業 35名: アステラス製薬(株)(2名)、(株)インテリム、オリンパス(株)、科研製薬(株)、杏林製薬(株)、クインタイルズ・トランスナショナル・ジャパン(株)(3名)、沢井製薬(株)、塩野義製薬(株)、(株)資生堂、シミック(株)、信越化学工業(株)、住友化学(株)、生化学工業(株)、ゼリア新薬工業(株)、第一三共(株)(2名)、第一三共RDノバーレ(株)、田辺三菱製薬(株)、中外製薬(株)(5名)、日産化学工業(株)、日本コルマー(株)、日本新薬(株)、マルホ(株)(3名)、(株)メディカルグリーン、(株)ヤクルト本社、FMD K & L JAPAN
公務員 1名: 千葉県庁
その他 1名: 千葉大学薬学部科目等履修生
帰国 3名: Pfizer(中国)、Unilever(中国)、未定(中国)
未定 1名

博士修了19名

- 病院 2名: 諏訪中央病院、聖隷佐倉市民病院
企業等 8名: アステラス製薬(株)、(株)エス・ディー・エス バイオテック、協和発酵キリン(株)、国立医薬品食品衛生研究所、日産化学工業(株)、日本エア・リキード(株)、日本マイクロバイオファーマ(株)、(株)ゼンショーホールディングス ポストドクター5名: 熊本大学国際先端医学研究機構、国立がん研究センター研究所、千葉大学大学院薬学研究院、Harvard University、Research Center for Molecular Medicine of the Austrian Academy of Science
教員 1名: 昭和薬科大学
帰国 2名: WuXi CDS(中国)、未定(中国)
その他 1名

2017年度 薬学部入学者の状況

入学者 86名 (男41名、女45名：推薦10名、帰国子女1名、前期64名、後期11名)

出身高校一覧

- 4名 県立千葉 (千葉)、渋谷教育学園幕張 (千葉)、東邦大学附属東邦 (千葉)
3名 大宮 (埼玉)
2名 札幌西 (北海道)、県立船橋 (千葉)、佐倉 (千葉)、芝浦工業大学柏 (千葉)、國學院大學久我山 (東京)、東京学芸大学附属 (東京)、柏陽 (神奈川)、横浜翠嵐 (神奈川)、浜松北 (静岡)
1名 八戸 (青森)、いわき秀英 (福島)、竜ヶ崎第一 (茨城)、宇都宮女子 (栃木)、市立浦和 (埼玉)、浦和第一女子 (埼玉)、川越 (埼玉)、川越女子 (埼玉)、西武学園文理 (埼玉)、東京農業大学第三 (埼玉)、市川 (千葉)、木更津 (千葉)、県立柏 (千葉)、国府台女子学院 (千葉)、佐原 (千葉)、昭和学院秀英 (千葉)、薬園台 (千葉)、青山 (東京)、穎明館 (東京)、桜蔭 (東京)、海城 (東京)、かえつ有明 (東京)、国立 (東京)、小松川 (東京)、駒場 (東京)、新宿 (東京)、東京学芸大学附属国際 (東京)、東京女学館 (東京)、戸山 (東京)、日比谷 (東京)、三輪田学園 (東京)、浅野 (神奈川)、県立横須賀 (神奈川)、日本大学 (神奈川)、大和 (神奈川)、横浜緑ヶ丘 (神奈川)、長岡 (新潟)、富山 (富山)、松本深志 (長野)、磐田南 (静岡)、加藤学園暁秀 (静岡)、沼津東 (静岡)、滝 (愛知)、四日市 (三重)、東大津 (滋賀)、八尾 (大阪)、米子東 (鳥取)、九州国際大学附属 (福岡)、宮崎大宮 (宮崎)、鶴丸 (鹿児島)、昭和薬科大学附属 (沖縄)、那覇国際 (沖縄)、Frankfurt International School (ドイツ)

2016年の受賞記録

【教員の受賞】

- 平成28年1月 Highly Cited Researchers 2015 (トムソン・ロイター社) 齊藤 和季 (遺伝子資源応用)
平成28年3月 2016年度日本植物生理学会・学会賞 (日本植物生理学会) 齊藤 和季 (遺伝子資源応用)
平成28年3月 日本農芸化学会2016年度大会トピックス賞 (日本農芸化学会) 鈴木 秀幸 (遺伝子創薬学)
平成28年5月 Elsevier Reaxys PhD Prize Finalist賞 米田 友貴 (薬品物理化学)
平成28年6月 日本食品化学学会第18回奨励賞 (日本食品化学学会) 東 恭平 (病態分析化学)
平成28年6月 日本毒性学会技術賞 (日本毒性学会) 関根 秀一 (生物薬剤学)
平成28年7月 第2回日化協LRI賞 (日本毒性学会) 小椋 康光 (予防薬学)
平成28年9月 平成28年度日本生薬学会・学術奨励賞 (日本生薬学会) 吉本 尚子 (遺伝子資源応用)
平成28年9月 平成28年度学術賞 (日本薬学会環境・衛生部会) 小椋 康光 (予防薬学)
平成28年11月 日本環境変異原学会学会賞 (日本環境変異原学会) 青木 康展 (環境リスク)
平成28年11月 大和エイドリオン賞 (大和日英基金) 大関 淳一郎 他 (舛本寛研究チーム) (遺伝子創薬学)

【学生の受賞】

- 平成28年3月 日本薬学会第136年会 優秀口頭発表賞 (日本薬学会) 柴崎 美里 (分子細胞生物学)
幸 龍三郎 (分子細胞生物学)
高梨 憲幸 (生体機能性分子)
金田 結 (活性構造化学)
優秀ポスター発表賞 (日本薬学会) 田中 光葉 (活性構造化学)
平成28年5月 日本薬剤学会第31年会 最優秀発表者賞 (日本薬剤学会) 青木 千咲 (製剤工学)
劉 楠 (製剤工学)
平成28年5月 第23回 HAB研究機構学術年会 最優秀発表賞 竹村 晃典 (生物薬剤学)
平成28年6月 Best Poster Award (ISLCC 2016) 中嶋 早紀 (薬品合成化学)
平成28年6月 The 1st Workshop for Japan-Korea Young Scientists on Pharmaceuticals Chair's Selection Award 薄田 健史 (生物薬剤学)
平成28年7月 Asian Graduate Congress on Pharmaceutical Technology Best Poster Award 與那城 葉月 (製剤工学)
平成28年7月 第11回トランスポーター研究会年会 優秀発表賞 原田 まなみ (薬物学)
梅原 健太 (薬物学)
鈴木 翔太 (薬物学)
薄田 健史 (生物薬剤学)
平成28年8月 第41回製剤・創剤セミナー 学生ポスタープレゼンテーション優秀発表賞 (日本薬剤学会) 片井 寛明 (製剤工学)
平成28年9月 第60回日本薬学会関東支部大会 優秀口頭発表賞 (日本薬学会) 岩井 隆暁 (製剤工学)
平成28年9月 Reaxys Ph.D Prize finalist 中島 誠也 (薬品合成化学)
平成28年9月 第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学会大会合同年会 優秀発表賞 梅原 健太 (薬物学)
鈴木 翔太 (薬物学)
森尾 花恵 (薬物学)
平成28年9月 平成28年度内外環境応答・代謝酵素研究会 最優秀発表賞 横堀 紘祐 (薬物学)
平成28年9月 第23回日本免疫毒性学会学術年会 学生・若手優秀発表賞 薄田 健史 (生物薬剤学)
藤森 惣大 (生物薬剤学)
平成28年10月 第21回天然薬物の開発と応用シンポジウム 優秀発表賞 小野沢 忠吉 (生体機能性分子)
金田 結 (活性構造化学)
越智 富美江 (活性構造化学)
平成28年10月 製剤機械技術学会第26回大会 優秀ポスター賞 (製剤機械技術学会) 一志 友夫 (製剤工学)

平成28年10月 第1回黒潮カンファレンス 最優秀発表賞 北村 啓太 (薬物学)
 最優秀ポスター賞 平尾 卓也 (生物薬剤学)
 優秀ポスター賞 菊谷 芽久美 (生物薬剤学)
 平成28年10月 日本薬物動態学会 第31回年会 ベストポスター賞 薄田 健史 (生物薬剤学)
 平成28年11月 最優秀ポスター発表賞 (第6回CSJ化学フェスタ) 森川 貴裕 (薬品合成化学)
 平成28年12月 Best Poster Presentation Award (2nd Joint WCCU and SMA) 中山 弘貴 (薬化学)
 平成28年12月 第33回井上研究奨励賞 中島 誠也 (薬品合成化学)

薬友会より

薬友会HPがリニューアル!

薬友会の皆様、いかがお過ごしでしょうか。さて、薬友会ホームページは一昨年度にリニューアルされました。(薬友会HPはこちら<http://yakuyukai.net/>)

これまでにも、同窓会開催のお知らせや、るのはな山岳会の活動の情報、薬友会情報など多くの情報を掲載しております。まだご覧でない方は是非、薬友会ホームページを訪れてみてください。

Facebookをご利用の方は、薬友会ホームページの情報をFacebookでもご覧いただけます。こちらのページ<https://www.facebook.com/yakuyukai/>をご覧ください。そして是非「いいね!」を押していただけると嬉しく思います。



皆様からの活動情報をいつでもお待ちしております。活動情報掲載のご希望は、以下の薬友会事務局または片桐までご連絡ください。

薬友会事務局 E-mail:yakuyukai@chiba-u.jp
(金曜日のみ)

片桐へ直接 E-mail:d.katagiri.ap@gmail.com

最後に、薬友会ホームページでは、広告協賛団体を募集しております。薬友会ホームページ運営のための貴重な収入として活用させていただく予定です。薬友会ホームページに広告協賛いただける方は、是非、ご連絡ください。お待ちしております。

お知らせ

薬友会のさらなる活性化のため、終身会員加入とご寄付をお願い申し上げます。

- 1) 終身会員：会費2万円、昭和48年に開設(現在加入率75%程度)。
- 2) ご寄付：一口2千円から随時受け付けています。特に終身会員会費が1万円であった会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。同封の振込用紙の通信欄の「終身会員」あるいは「寄付」に☑を入れ、氏名、住所、卒業年度をご記入いただき、<郵便為替口座00150-5-551796千葉大学薬友会>をお願い申し上げます。
- 3) 薬友会に関連してご質問がございましたら以下にご連絡下さい。金曜日には(毎週ではありませんが)専任の担当者(茶田)が在室しています。

E-メール：yakuyukai@chiba-u.jp

F A X：043-226-2873

平成29年度各種委員会名簿

(○印:委員長。前委員長はアドバイザーとして参画。)

総務委員会 ○西田 篤司、荒井 秀、原田 真至、村山 俊彦(前委員長:アドバイザー)

財務委員会 ○伊藤 素行、溝口 貴正、殿城亜矢子、村上 泰興(S36)、高屋 明子(前委員長:アドバイザー)

名簿委員会 ○樋坂 章博、佐藤 洋美、畠山 浩人、村上 泰興(S36)、高山 廣光(前委員長:アドバイザー)

事業委員会 ○森部久仁一、東 顕二郎、植田 圭祐、渡辺 楷(S33)、秋田 英万(前委員長:アドバイザー)

広報委員会 会報担当部門:○村山 俊彦、中村 浩之、渡辺 楷(S33)、加藤 文男(S47)、佐藤 信範(前委員長:アドバイザー) 情報担当部門:○片桐 大輔(H13)、中村 浩之

訃 報

千葉大学名誉教授 仲井由宣先生(91歳)は、平成29年1月18日(水)にご逝去されました。在りし日の仲井先生を偲び、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

仲井先生は、昭和37年に助教授として千葉大学薬学部にて赴任されました。昭和42年から平成3年までの25年間、千葉大学薬学部製剤工学研究室の教授として学生の教育・研究指導に尽力され、学界、製薬業界等で活躍する多くの優秀な卒業生を輩出されました。その間、千葉大学薬学部長、評議員として薬学部の発展に寄与されました。また、日本薬剤学会会長や製剤機械技術研究会会長等を歴任され、薬剤学や製剤技術の発展に貢献されました。これらのご業績に対して、平成15年4月には勲3等旭日中綬章を受章され、平成29年2月には正四位を叙位されました。

(森部 久仁一)

第26回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会開催のお知らせ

日時：平成29年7月8日（土）

13：00～16：00

場所：千葉大学薬学部120周年記念講堂

（医薬系総合研究棟Ⅱ 1階）

〒260-8675

千葉市中央区亥鼻1-8-1）



・JR千葉駅、京成千葉駅到着後、JR千葉駅東口正面7番のバス乗り場から「千葉大学病院」行きバス、または「南矢作」行きバスに乗り、「千葉大薬学部前」で下車。約15分

主催：千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会

共催：日本薬剤師研修センター（参加者には日本薬剤師研修センターより単位が認定されます。）

テーマ：「製剤・包装技術の進歩に伴う医薬品の変遷」

生涯教育セミナー

1) 「経皮吸収製剤に使われている製剤技術」

徳留 嘉寛 先生（城西大学 薬学部）

2) 「経口固形製剤に織り込まれている製剤技術－吸入粉末剤や徐放性製剤を中心に－」

伊藤 敦俊 先生（第一三共株式会社 製剤技術研究所）

3) 「最近の包装技術の進歩」

丸橋 宏一 先生（アステラス製薬株式会社 製剤研究所）

宮木高明記念講演会

「期待する治療効果を得るための賢い製剤の選択」

並木 徳之 先生（静岡県立大学 薬学部）

終了後懇親会があります。 医薬系総合研究棟Ⅱ 大会議室（記念講堂の階下）

セミナー参加費 無料

意見交換会(懇親会)参加費 3,000円（当日）

参加申込み 不要です。当日お越し下さい。

本セミナーに関するお問い合わせは薬学研究院（製剤工学研究室）森部久仁一までお願いいたします。

（電話：043-226-2865／FAX：043-226-2867／e-mail：moribe@faculty.chiba-u.jp）

編集後記

薬友会の会員の皆様のご協力を頂き感謝申し上げます。また、ご寄稿頂いた皆様、お写真を提供して頂いた皆様に御礼申し上げます。
(村山 俊彦)

広報委員会 会報担当部門

村山 俊彦（委員長）、中村 浩之、渡辺 楷（S33）、加藤 文男（S47）、佐藤 信範（前委員長）